

V 研 究

刳拔式木棺小考

森 下 章 司

は じ め に

刳拔式木棺は弥生時代に登場し、古墳時代にはいわゆる首長墓の棺に用いられた。その普及過程は個人墓としての墳丘墓の発達と関連している。たとえば北陸地方においては、弥生時代中期に刳拔式木棺が現れ、区画墓を中心に組合式木棺とは区別して用いられ、古墳時代初頭に首長墓に用いられる棺の主流となってゆく（前田1999）。

古墳時代前期には、周囲を石積みで覆って竪穴式石室（石槨）を構築するようになる。長さ4 mを越えるような長大な刳拔式木棺が、大型前方後円墳を中心に上位の埋葬施設として広く各地で用いられる。長大な木棺は定型化した古墳成立の指標のひとつともされている（近藤1977）。その後、粘土槨あるいは木棺直葬と周囲の施設の簡略化は進むが、古墳時代中期においても主要な棺の形式として用いられ続けた（森下2003）。また上位の棺形式ではなくなるが、後期にも存続する。

定納古墳群において今回に確認しえた埋葬施設は、いずれもこの長大な刳拔式木棺を用いたものであった。とくに5号墳では周囲が粘土で固められていたため、棺の痕跡がよく残っており、木棺形態や埋葬手順を復元するための材料を得ることができた。この事例を基礎とし、他の例を広く比較することによって、調査の知見を木棺研究に役立てることをめざしたい。

1 木棺形態の復元

古墳時代の木棺は実物の遺存例がきわめて少なく、ほとんどが土中で腐朽している。その形態について論ずるときは、土中の痕跡を手がかりとした復元にもとづくことになる。そうした復元においては、いくつかの前提や条件を必要とする場合が多い。ここでは痕跡と、そこから得られる復元との関係についてまず整理しておきたい。

木棺は、その構造から組合式と刳拔式に大別するのが一般的である。遺構において両者を区別する手がかりは、縦横の断面形、床面、端部に関する土層状況などにある。組合式木棺は箱形を呈するのが基本であり、断面が方形となる。楔や釘を用いない形式の組合式木棺は、側板や小口板を立たせるために、板のどこかを周囲の土や粘土で支える必要がある。側板が小口板をはさむ場合は、その端が飛び出し、平面がH字形となるものが多い。また小口板が底板より下に出る形式ではそれが床の部分に掘り込みや土の食い込みとして残る（福永分類のⅠ型木棺 福永1985）。一方、小口板や側板が底板上に乗る形式（Ⅱ型木棺）では、その組合方法が痕跡として明瞭に残ることは期待できない。

刳拔式では丸木材を半裁し、中を刳抜いて遺骸や副葬品の収納部分を設ける。外側はおおむね丸木の形を残すのが基本であり、身の断面形は弧を描く。これを設置する際、そのままでは不安定な棺の下部を固定するために、墓壙底を掘りくぼめたり、棺床を設けたりする。その結果、下向きに弧を描く断面が土層に反映する。棺床に特別なこしらえがない場合も、埋土の食い込みや棺内に施された顔料の層によって断面の形を読み取ることができる。

蓋については、組合式、刳拔式のいずれにしても、腐朽の過程で棺内の空洞部へ埋土や被覆粘土が一気に

陥没し、その形が失われてしまう場合が多い。

以上は木棺形状をおおまかに復元する際の基本的な観察要素であると考えるが、例外や細分の際の問題点について触れる。

木棺が良好に残っていた例の中に、断面が方形を呈しながら板による組合式ではないものがある。

大阪府土保山古墳は木棺が完存した例として知られているが、2号棺については「5つの部材を組合せてある。すなわち、断面L字形の2つの部材を向き合わせて身の底と側とし、側板の両端に近く溝を彫って2枚の小口板をはめて棺身をつくり、これに断面弧状の蓋をかぶせたものである」と描写されている(原口1973)。断面方形ではあるが、そのかたちは板材の組合せによるものではなく、原材を大幅に削り込んで加工したものをあわせ用いている。

この例から推測すれば、半裁した丸木の外面を方形に加工した刳拔式木棺が存在した可能性もあるだろう。単に土層断面が方形というだけでは、身の構成が決定できないことを示す。識別の手がかりは端部の状況にあるが、明確な判断は困難であろう。組合せを示すH字形の平面形や底部において板小口の痕跡が確認されていない例については、断面方形の土層痕跡があっても組合式ではない可能性も検討する要があるだろう。詳しい状況は不明であるが、「箱形の組合式の棺」と考えられた大阪府黄金塚古墳東槨の例など、端部の状況から、刳拔式の可能性も検討の要があるだろう(末永・島田・森1954)。

すなわち断面が方形であることのみから木棺形式を判断する場合、側板や小口板の突出といった組合式を示す材料がない限り、「箱形木棺」と呼称しておくほうが安全である。なお断面が方形を呈する埋葬施設において、底板が無く、梓と蓋を板材で設けた例が知られている(石崎1997)。

刳拔式木棺については、名称にやや混乱がある。竪穴式石室や粘土槨が刳拔式木棺を覆う施設であることを明らかにした小林行雄は、「割竹形木棺」という名称でその形状を表現した(小林1941)。滋賀県安土瓢箪山古墳の竪穴式石室の断面図を用い、粘土床の上面が弧を描くことから、そこに断面円形の木棺が載せられていたものと復元し、それを覆うものとして石室壁が積まれていることを示した。

その論文で用いられた竪穴式石室と割竹形木棺の断面復元図が強い印象を与えたせいか、割竹形木棺の条件として断面が正円形であるというとらえ方が広まるにいたった。棺床のカーブが円形でない場合、「舟形木棺」といった別種の木棺形式を想定する名称を用いることも多い。

横断面形の違いを棺形式の分類要素として重視するのは、刳拔式石棺とくに舟形石棺との対比によるものとする。しかし、木棺においてそれが全体の形状の差に結びつくのかどうか、検討の余地がある。棺身の底面が半円形をなすか、半楕円かという違いが、他の諸要素の違いとも関連するかどうかは確認されていない。自然木の形状は必ずしもきれいな円形を呈さないし、部位によって形に違いが生ずる。きれいな円形を呈するものは、外面を削って丁寧成形したことを示す可能性もある。

「舟形木棺」のように、舟と関連付けて用いられる用語では、舟を転用した木棺(岡本・押野1996 棺蓋なし)、棺全体が舟の形状と類似するもの(石崎2001のいう「舟底状木棺」 棺蓋あり)、横断面がゆるい弧をなし「舟形石棺」と類似するものなどがあり、区別が明確でない。いずれにしても木棺形式の復元においては棺床の断面形態だけでなく、他の要素とあわせて検討する必要がある。

なお用語に関連する問題として、ここでとくにとりあげる木棺の端部について整理しておく。一般に木棺の両端部のことを「小口」と呼び、そこに立てられた板を「小口板」と呼ぶことが定着している。しかし後で触れるように、大阪府久宝寺1号墳のほぼ完存した木棺では、小口板が棺の端部よりいちじるしく内側に立つ場合があることが判明した(西村・南條2003)。この部分を「小口」と呼ぶと、指し示す範囲が大きくなる。またそうした内部に立つ小口板の有無や位置については、木棺が腐朽している場合は確認するすべがない。

そこで、検出された棺身の端を「端部」と呼ぶことにし、それより内側に立つ板については、外面となる

かどうかは別として「仕切板」と総称する。

このように木棺形式の復元においては、まだ考慮すべき可能性や条件がいくつもある。とくに刳拔式木棺については現在、識別しやすい棺床の断面形に関心が偏っており、その他の要素について検討の要がある。ここでは定納5号墳の例をもとに、木棺形式の諸要素について言及する。

2 定納5号墳の木棺

5号墳からみつかった2つの木棺痕跡について、基本的な情報はすでに記したが、再度その特徴についてまとめておく。

一番の特徴は、ひとつの墓壇内に異なる形態の木棺が納められていたことである。両者は大きさ、端部の構造に違いがあり、埋葬の手順についても差が考えられる。

西棺は長さで東棺を1.8m上まわる。この木棺の端部は板や刳り残しによって塞がれることなく、開いたかたちであったと復元する。

両端に置かれた粘土塊は、棺の端部を塞ぐ機能をもっていたと考えられる。木棺周囲に粘土を敷いてゆく



図33 定納5号墳埋葬施設レーザー3次元計測図

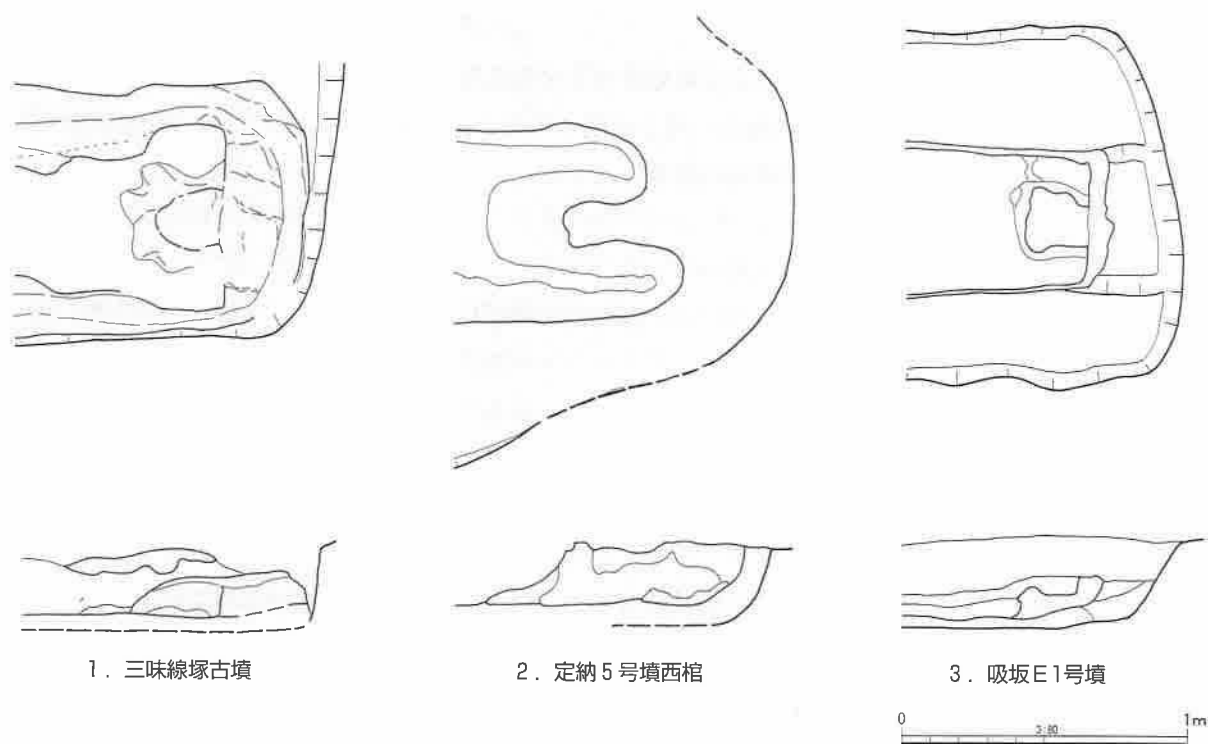


図34 棺頭に粘土塊を据える刳拔式木棺埋葬
(網部は粘土使用部分を示す)

際、一連の作業として設けられたものである。棺内の赤色顔料層がこの粘土塊の下に続いていることを確認しており、棺内に顔料を撒いた後、その上に粘土を積み上げてこの塊をつくりあげたことがわかる。粘土塊中にも薄い顔料の層が複数認められ、積み上げの過程において顔料を散布する機会が何度もあったことを示す。また粘土塊の表面全体も顔料で覆われており、積み上げの最終段階ではとりわけ丁寧に顔料が施された。木棺の蓋をかぶせたのは、粘土塊の設置後である。

棺の端部を粘土塊で塞ぐ方式は、他の古墳にも例がある（図34）。愛知県三味線塚古墳例（三田ほか2001）や石川県吸坂E1号墳例（浜崎ほか2002）などと比較すると、粘土塊のかたちなども似通っている。分布が各地に広がることから一定の普遍性をもった施設とみる。これらはその構造によってさらに分類することができる。被覆粘土があり、粘土槨の一部として設けられたもの（三味線塚）、被覆粘土はないが棺床粘土から棺内に粘土を延長させたもの（定納5号）、棺周囲の粘土がほとんど省略され、塊の部分にのみ粘土を使用したもの（吸坂E1号）がある。

一方東棺では、端部に接する部分の棺床粘土がほぼ垂直に立ち上がる。開放式であっても粘土の用い方次第で同様の状況となりうるが、北端では垂直面にも赤色顔料の塗布が認められたこと、端部に接した部分の粘土面が整っていることなどから、丸木を直裁し、棺身の中を刳抜き、端部を掘り残した棺形式であったと考える。また北端から約10cm内側に刀子が置かれていたことから、端部の身の厚さが推定できる。

このように5号墳では同一墓域内に異なる形式、とくに棺身端部の形態が違う木棺を納めていたのである。

3 刳拔式木棺の形態

(1) 横断面・縦断面の形状

前に述べたように、棺身の断面形は割竹形木棺を分類する際にもっとも注目されることが多い要素である。

古墳時代の棺について、底の断面形が半円形に近いものと弧のゆるいものの双方があったことはまちがいない。大阪府久宝寺1号墳は古墳時代初頭の刳拔式木棺がほぼ完全に遺存していた例としてきわめて貴重であるが、蓋とあわせた断面はほぼ円形を呈する（西村・南條2003）。奈良県下池山古墳の木棺遺存例も「身の外形の断面形はほぼ半円を呈し、小口部は垂直に切り落とした形状をなす」とされる（岡林1997）。棺が遺存していない場合でも、石川県雨の宮1号墳例では粘土槨の遺存状況が良好で、棺の外形がよくわかる（中屋2005）。この場合は縦にやや長い円形の横断面形をみることができる。ただし棺端の突起の位置から丸木を中央で半裁したものではなく、棺身が深く棺蓋が薄いかたちで復元されている。

縦断面に関しても2種類を区別することができる。定納5号墳の例のように、底面がほぼ水平に続くものが多いとみるが、端部の底が反りあがる形もあったようだ。前期前半に位置づけられる兵庫県権現山51号墳では、竪穴式石室にともなう棺床上面は「南北の両小口部分は緩く反り上がっており、棺底面と小口面が直角をなすものでない」「木棺の底部の形状は、むしろある種の船形石棺のそれに類似したものと推定される」と述べられている（近藤(編)1991 36頁）。さらに時期的にさかのぼる可能性がある徳島・西山谷2号墳では「小口部は緩やかにカーブを描き、上方に緩やかに立ち上がり、舟底状を呈する」とされる（徳島県埋文2001）。また前期においても、棺の両端で形状が異なる形式が存在した可能性がある。京都府寺戸大塚古墳前方部埋葬施設では、「木棺小口の形態は、北と南で異なっていたと推定される。つまり、北小口は棺底面と小口面が直角を成していたのに対し、南小口では上方に開き気味に立ち上がるものであったと考えられる」（梅本ほか2001）。これらは弥生時代の舟底状木棺とのつながりが注意される（石崎2000）。

さらに間接的な痕跡による議論となるが、竪穴式石室下部の状況も棺端部の形態を考える材料となる。大阪府紫金山古墳（阪口2005）、京都府寺戸大塚古墳前方部石室（梅本ほか2001）、愛知県東之宮古墳（赤塚2005）などでは、竪穴式石室壁体の下部の裏込めに用いられた小礫が、ほぼ垂直に立ち上がり、棺側に面をもつ。棺の端部が石室の裏込めと壁体に密着しており、突起部をもたない形式であったとみることができる。ただ逆に棺床端部と石室壁の間に空く例が、突起のせい、あるいは石室構築の手法の違いによるものもふくまれるのかは簡単には判断できない。

竪穴式石室における棺床のあり方として、京都府椿井大塚山古墳で端部が被覆粘土状に高く遺存していた例にも注意しておきたい（樋口1998）。

(2) 端部の形式（図35）

端部開放式 大阪府久宝寺1号墳1号主体部の棺がもっとも残りのよい例である（西村・南條2003）。長さ3.28mの長大な木棺であり、身と蓋の双方とも半円形の断面形を示す。身の端部は開放式で、別に円形の仕切板を端から約55～75cmのところ立てていた。仕切板が位置する身の内面部分には、浅い溝があるだけで固定のための特別なしつらはない。土砂の流入によって北仕切板は内側に倒れ、内に向かって傾斜する土層が形成されている。同様の仕切板を用いた例は、大阪府南天平塚古墳などで報告されている。南天平塚の例も「身には首端から一八センチ、尾端から二一センチ入り込んだところに幅九センチの溝がうがたれ、そこに半円形の嵌板を装置し」たようである（藤沢1961）。この種の端部形式は土砂の流入状況から判断できる可能性もある。

久宝寺1号墳例では仕切板が端部よりかなり内側に位置するため、埋葬空間の長さは182cmにとどまる。両小口板近くでそれぞれ歯牙が残存しており、2体埋葬であったと考えられる。木棺の長大性は、空間を有効に利用することには活かされていない。棺の長大性は、とくに外見を意識したものとも考えることもできる。

端部開放式（外当て板） 大阪府黄金塚古墳中央槨に残された棺の端部は、開放式の端部の外側に別板をあてる形式であった（末永・島田・森1954）。この事例が著名になって、竪穴式石室の復元例でもそうした木棺を

想定する場合が多い。痕跡としては残りやすい形式であり、大阪府弁天山C 1号墳後円部竪穴式石室（原口・西谷1967）、奈良県鴨都波1号墳（藤田・木許(編)2001）などで報告されている。兵庫県梅田1号墳などもこの形式と考えられる（菱田(編)2002）。ただし痕跡としては残りやすい形式にも関わらず、確認例がそれほど多いわけではない。

端部刳残し式 割竹形石棺や舟形石棺の表現にみられるように、端部に一定幅を残して内部を刳抜き、身と一体のものとして小口をつくり出す形式である。石棺表現においては、一定の短い幅を掘り残し、その内側をほぼ垂直に落とし、蒲鉾形に刳抜く。端部外面は垂直に裁ち落とした直裁式である。一方、栃木県七廻り鏡塚古墳のきわめて残りのよい木棺例は端部が曲線を描き、隅丸方形を呈する（大和久(編)1974）。粘土槨に痕跡が残された例として、静岡県若王子12号墳では長さ6.9mに及ぶ木棺痕跡の一端は直裁式であるが、もう一端は先が細く終わる尖頭式とされている（藤枝市教委1983）。埼玉県埼玉稲荷山古墳第1主体においても、礫床の凹みの一端が尖頭式となっている（さきたま資料館(編)1980）。「舟棺」ないし「舟形木棺」との関連が注目されている例である（岡本1999）。

この形式は、刳残された幅の広狭によって区分できる。栃木県七廻り鏡塚古墳出土木棺は、端部に突起をもつが、突起をのぞいた長さは5.13m。遺骸を納める空間は、端部から約0.9m幅を残して、内法の長さ3.21mの刳抜きによってつくり出している（大和久(編)1974）。刳こみの周囲に長方形の段をめぐらし、蓋と印籠合せ形式で組合せる。端部から刳りこみ部端までが、側縁の幅よりもはるかに広いことが特色である。なおこの木棺端部の底面は反りをもち、両端で形態を異にする。

七廻り鏡塚古墳の棺は後期の例であるが、長大な木棺中央部の一定の長さだけを刳抜き、両端に比較的長い刳残し部分を設けた棺は、古墳時代前期の早い段階から存在が想定されている。奈良県下池山古墳から出土した、前期古墳としては希有な遺存状況を示す刳抜式木棺は、「棺内は大きく三分割され、両端部分は刳残される。中央の棺内空間も深さ20cmに満たず、長さも全長の1/2以内にとどまると推定される」と観察され

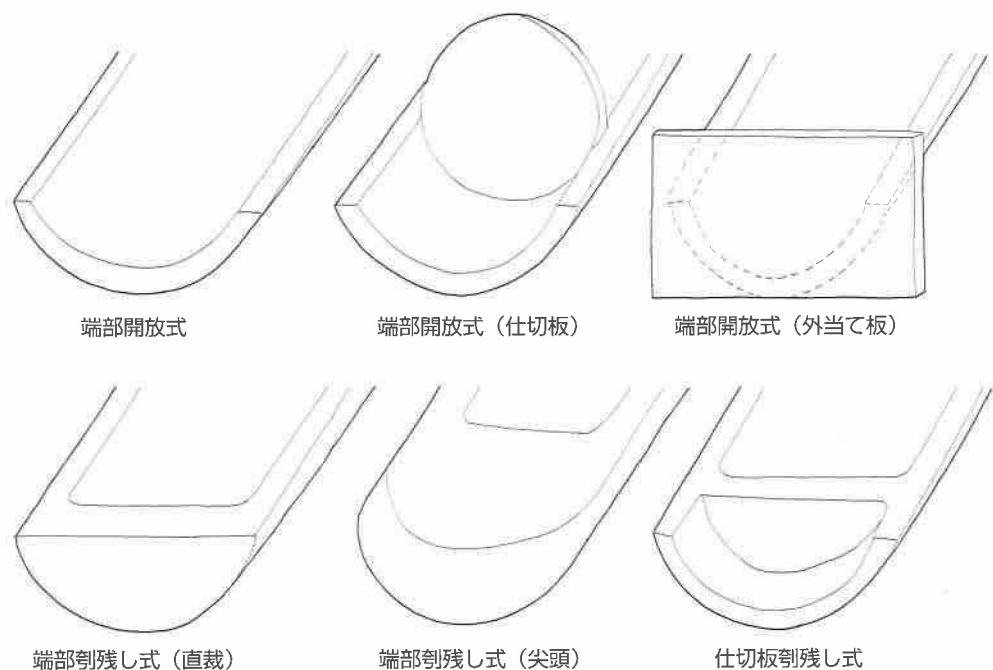


図35 木棺端部の分類

ている（岡林1997）。また三角縁神獸鏡の大量出土で知られる奈良県黒塚古墳の竪穴式石室内の棺は、長さ6.2mに復元されるが、顔料分布の違いや内部の埋土や落下した石材の堆積状況から、中央部の長さ約2.8mの部分のみが剝抜き部分であったと推測されている（岡林1999a）。

この形式の木棺では、収容空間が狭くなる一方、重量は大幅に増加する。長大な剝拔式木棺においては、外見の大きさが重視されたことを示す材料ともなるだろう。下池山古墳や黒塚古墳のような大和古墳群に築かれた古墳に採用されており、前期において重要な意義をもつ棺形式であった可能性がある。

棺が遺存していない場合、埋土の縦断面の慎重な観察を要するなど、土中では見極めにくい形態であり、潜在例があることを想定する必要がある。時期は異なるものの、京都府大風呂南1号墓第1主体の例を取りあげる（白数ほか2000）。棺の外形は石崎のいう舟底状木棺に復元できるが、赤色顔料の分布がくぼみの中央の長方形部分にのみ限られる点が注目される。副葬品の位置も対応するこの範囲を腐朽が進行する前の剝込み部分とし、端部に幅広い剝残しが本来はあったものとも想定できないだろうか。

(3) その他の要素

滋賀県雪野山古墳では端部の粘土床において半環状突起の痕跡が検出された（福永・杉井(編)1996）。この突起がとりつく棺本体の端部は、剝残しによってかたちづくられていたものと推測できる。棺の北端部からやや南に隙間を空けて農工具類がまとまって置かれている。この幅が剝残しによる端部の厚みと復元できる。

この木棺は底面の横断面のカーブがきわめてゆるく、また中に2つの仕切り板の存在が認められ、佐賀県熊本山古墳の舟形石棺とよく似ていることが注目されている。外形と内部の状況をあわせて、剝拔式木棺の全体像に近づく資料として重要である。

石川県雨の宮1号墳では棺端部において身と蓋の双方に各2、計4個の円柱状突起のあったことが痕跡から確認された。慎重な調査から突起の存在を明らかにした貴重な例である（中屋2005）。粘土槨であってもこの部分がきれいに残存することはあまり期待できず、検出は困難が多いものと思う。竪穴式石室の場合は、棺床から突起の高さが浮いた位置にくることがほとんどであり、痕跡の残存はほとんど期待できない。粘土槨の場合も腐朽にともなう崩落により、痕跡を残しにくい。実際の検出例は限られているものの、突起をもつ剝拔式木棺は一定以上存在したと考えたほうがよい。今尾文昭は雪野山古墳例を手がかりとして、棺床と石室壁の間の距離から突起部の有無を推測する方法を考えている（今尾1995）。

もうひとつ別の要素についても触れておく。福岡県若八幡宮古墳の埋葬施設は、棺身は「舟形木棺」であり、平坦な蓋をもつものと復元されている（柳田・副島1971）。いくつかの特異な点がみられるが、とくに目張りと考えられる粘土が、棺身の凹み外郭から10cmあまり離れた位置で方形にめぐっていたことは注目される。報告では蓋が身よりも大きかったのではないかと想定されているが、この位置にいわゆる舟べり状突帯を想定することはできないだろうか。棺床の凹みと粘土との間は明確に平らな面をなしていたと報告されており、そうした突帯の存在を想定するとうまく説明できる。石棺の例からみても、舟べり状突帯をもつ棺が一定数存在した可能性はある。

4 剝拔式木棺のかたち

近年の調査例から、弥生時代後期には大型の墳墓などで剝拔式木棺が用いられていたことが明らかとなってきたが、古墳時代の剝拔式木棺との系譜関係について議論は決着していない。石崎は端部の縦断面形が垂直に立ち上がることなどから、異なる棺形式とも考えられている（石崎2001）。しかしここでみたように、古墳時代前期においても端部にはさまざまな形態の棺が想定され、弥生時代の要素と共通するものもみられる。今尾文昭は前方後円墳成立の当初から棺形態においていくつかの種類が並存することを強調する（今尾1995）。

古墳時代の刳拔式木棺につながる系譜はひとつではないかもしれない。

前期末～中期前半になると、一古墳に複数の埋葬施設や棺を納める例が多くなる。そこでは異なる形態の棺をあわせ用いる例がめだつ。定納5号墳はその典型例にあたり、ひとつの墓壙に、端部形態のほか、大きさ、設置方法も異なる二つの棺が同時に納められていた。こうした木棺形態の違いは一般に、時期差や地域性のほかに、性別・階層・出自など被葬者の違いを表示するものと考えられている。刳拔式と組合式の木棺形式、竪穴式石室、粘土槨、木棺直葬といった設置施設、箱式石棺や埴輪棺のように棺の素材などさまざまな要素に違いのある埋葬施設が、ひとつの墳丘、ひとつの墓壙に共存する例がすでに知られている。

木棺の細部における違いが、どこまで強く当時の人々に意識されていたかはわからない。しかし定納5号墳の場合のように、そうした要素の中には埋葬の手順の違いと結びつくものもある。どのようなかたちの棺を選ぶのかという点において、被葬者の違いに細かく対応した区分が存在していた可能性がある。

弥生時代の組合式木棺を対象とした福永伸哉の研究では、木棺形態の違いが被葬者の出自の違いと結びつくものと想定された(福永1985)。組合式木棺の場合、墓壙内で組み立てられる際にその形式の違いが示される。それに対して刳拔式木棺は、製作、移送、設置の各段階において、形態や大きさが人々の目にはっきりと触れることになり、その違いがよりめだつ。組合式と比べたときの刳拔式木棺の特性である。さらに検討を続けたい。

参考文献

- 赤塚次郎 2005 『史跡東之宮古墳調査報告書』犬山市埋蔵文化財調査報告書第2集 犬山市教育委員会
- 石崎善久 1997 「京都府下における礫床をもつ木棺について」『浪江庸二先生・林和廣先生追悼 太邇波考古学論集』両丹考古学研究会 127-137頁
- 石崎善久 2000 「弥生墳墓の構造と変遷—舟底状木棺を中心として—」『丹後の弥生王墓と巨大古墳』季刊考古学別冊10 雄山閣 65-72頁
- 石崎善久 2001 「舟底状木棺考—丹後の刳拔式木棺—」『京都府埋蔵文化財論集』第4集 京都府埋蔵文化財調査研究センター 67-78頁
- 今尾文昭 1995 「木棺—棺形態の二、三—」『季刊考古学』第52号 前期古墳とその時代 雄山閣 43-47頁
- 今尾文昭 2004 「前期古墳の副葬品配列」『考古資料大観』第10巻 弥生・古墳時代 遺跡・遺構 小学館 60-74頁
- 梅原末治 1940 「本邦上代高塚の内部構造に就いて」『史林』第25巻第3号 史学研究会 1-22頁
- 梅本康広・佐々木憲一・茂木麻予・藤井康隆 2001 「石槨の構造」『寺戸大塚古墳の研究』I 財団法人向日市埋蔵文化財センター 61-76頁
- 大和久震平(編) 1974 『七廻り鏡塚古墳』大平町教育委員会
- 岡林孝作 1997 「竪穴式石室」「木棺」『下池山古墳 中山大塚古墳発掘調査概報』大和の前期古墳Ⅱ 奈良県立橿原考古学研究所 学生社 40-42頁
- 岡林孝作 1999 a 「粘土棺床」『黒塚古墳調査概報』大和の前期古墳 奈良県立橿原考古学研究所 学生社 62-64頁
- 岡林孝作 1999 b 「大和天神山古墳出土木棺の再検討」『青陵』第102号 奈良県立橿原考古学研究所 3-7頁
- 岡林孝作 2002 「木槨・竪穴式石室」『日本考古学協会 2002年度 橿原大会 研究発表会資料』日本考古学協会2002年度橿原大会実行委員会 253-262頁
- 岡本東三・押野一貴(編) 1996 『千葉県館山市大寺山洞窟第3・4次発掘調査概報』千葉大学文学部考古学研究室
- 岡本東三 1999 「よみがえる舟葬論」『図説 古墳研究最前線』別冊歴史読本23 第24巻23号 新人物往来社 36-41頁
- 小栗明彦(編) 1999 『三陵墓西古墳』奈良県立橿原考古学研究所・都祁村教育委員会
- 北野耕平 1964 a 「富田林真名井古墳」『河内における古墳の調査』大阪大学文学部国史研究室研究報告第1冊 51-83

頁

北野耕平 1964 b 「駒ヶ谷宮山古墳」『河内における古墳の調査』大阪大学文学部国史研究室研究報告第1冊 84-118

頁

小林行雄 1941 「竪穴式石室構造考」『紀元二千六百年記念史学論文集』京都帝国大学文学部 1147-1168頁（同1976『古墳文化論考』平凡社に所収）

小林行雄 1946 「日本古墳の舟葬説について」『西宮』第3号 西宮史談会 17-36頁（「舟葬説批判」と改題・改稿して『古墳文化論考』に所収）

近藤義郎 1977 「前方後円墳の成立」『考古論集』慶祝松崎寿和先生六十三歳論文集 249-256頁

近藤義郎(編) 1991 『権現山51号墳』権現山51号墳発掘調査団

阪口英毅 2005 「副葬品の配置」『紫金山古墳の研究ー古墳時代前期における対外交渉の考古学的研究ー』平成14~16年度科学研究費補助金（基盤研究（B）（2））研究成果報告書 京都大学大学院文学研究科 117-124頁

さきたま資料館(編) 1980 『埼玉稲荷山古墳』埼玉県教育委員会

沢田康夫・佐藤昭則 1983 『井河古墳群』那珂川町文化財調査報告書第10集 那珂川町教育委員会

沢田康夫 1983 「妙法寺古墳群発見の割竹形木棺について」『井河古墳群』那珂川町文化財調査報告書第10集 那珂川町教育委員会 17-18頁

白敷真也・肥後弘幸・長谷川達・高田健一 2000 『大風呂南墳墓群』岩滝町文化財調査報告書第15集 岩滝町教育委員会

末永雅雄・島田暁・森浩一 1954 『和泉黄金塚古墳』日本考古学報告第5冊 綜藝社

瀬川貴文 2005 「古墳時代後期の木棺とその多様化」『井ノ内稲荷塚古墳の研究』大阪大学文学研究科考古学研究報告第3冊 大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団 425-446頁

高木恭二 1987 「九州の舟形石棺」『東アジアの考古と歴史』下 岡崎敬先生退官記念論集 234-267頁

都出比呂志 1986 『竪穴式石室の地域性的研究』昭和60年度科学研究費補助金（一般C）研究成果報告書 大阪大学国史研究室

徳島県埋蔵文化財センター 2001 『阿讃山脈東南縁の古墳群ー四国横断自動車道の建設に伴う埋蔵文化財調査概報ー』徳島県埋蔵文化財センター調査概報第3集

豊岡卓之・卜部行弘 1996 a 「竪穴式石室」『中山大塚古墳 附篇 葛本弁天塚古墳 上の山古墳』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第82集 奈良県立橿原考古学研究所 45-55頁

豊岡卓之・卜部行弘 1996 b 「後円部上部の築造と墓壙」『中山大塚古墳 附篇 葛本弁天塚古墳 上の山古墳』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第82集 奈良県立橿原考古学研究所 161-168頁

中屋克彦 2005 「埋葬施設」『史跡 雨の宮古墳群』鹿西町教育委員会 71-90頁

西村歩・南條直子 2003 『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書』Vー大阪竜華都市拠点土地区画整理事業（都市機能更新事業）に伴う発掘調査ー 財団法人大阪府文化財センター調査報告書第103集 財団法人大阪府文化財センター

服部聡志 1987 「大塚古墳の埋葬施設について」『豊中大塚古墳』豊中市文化財調査報告第20集 豊中市教育委員会 161-169頁

浜崎悟司・立原秀明・広岡公夫・佐竹俊昭 2002 『加賀市吸坂・黒瀬古墳群』一般国道8号改築工事（南郷拡幅）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 石川県教育委員会・財団法人石川県埋蔵文化財センター

原口正三・西谷正 1967 「弁天山C1号墳」『弁天山古墳群の調査』大阪府文化財調査報告第17輯 大阪府教育委員会 46-112頁

原口正三 1973 「土保山古墳」『高槻市史』第6巻考古編 高槻市史編さん委員会 63-68頁

樋口隆康 1998 『昭和28年 椿井大塚山古墳発掘調査報告』京都府山城町文化財調査報告書第20集 山城町

- 菱田淳子(編) 2002 『梅田古墳群』Ⅰ－播但連絡道路(5期事業)に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ－ 兵庫県文化財調査報告第240冊 兵庫県教育委員会
- 福永伸哉 1985 「弥生時代の木棺墓と社会」『考古学研究』第32巻第1号 考古学研究会 81-106頁
- 福永伸哉・杉井健(編) 1996 『雪野山古墳の研究』雪野山古墳発掘調査団
- 藤井康隆 2001 「向日丘陵前期古墳群の竪穴式石槨について」(『寺戸大塚古墳の研究』Ⅰ 財団法人向日市埋蔵文化財センター) 141-157頁
- 藤枝市教育委員会(編) 1983 『若王子・釣瓶落古墳群』志太広域都市計画蓮花寺池公園事業に伴う文化財調査概要
- 藤沢一夫 1961 「古墳文化とその遺跡」『豊中市史』第1巻 豊中市役所 36-126頁
- 藤田和尊・木許守(編) 2001 『鴨都波1号墳 調査概報』御所市教育委員会 学生社
- 前田清彦 1999 「北陸の木棺墓とその展開」『北陸の考古学』Ⅲ 石川考古学研究会々誌第42号 石川考古学研究会 97-115頁
- 三田敦司・森泰通・飯塚邦男・川口昌代 2001 『三味線塚古墳』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第18集 豊田市教育委員会
- 森下章司 2003 「中期古墳の粘土槨系木棺埋葬」『古代日韓交流の考古学的研究－葬制の比較研究－』平成11～平成13年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(1))研究成果報告書 59-68頁
- 柳田康雄・副島邦弘 1971 「若八幡宮古墳」『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第2集 福岡市大字徳永・飯氏所在の遺跡 福岡県教育委員会 7-44頁
- 吉留秀敏 1989 「九州の割竹形木棺」『古文化談叢』第20集(中) 九州古文化研究会 1-41頁
- 吉村和昭 2004 「中期古墳の副葬品配置」『考古資料大観』第10巻 弥生・古墳時代 遺跡・遺構 小学館 75-91頁
- 和田晴吾 1995 「棺と古墳祭祀－『据えつける棺』と『持ちはこぶ棺』－」『立命館文学』第542号 立命館大学人文学会 22-49頁
- 和田晴吾 2002 「組合式木棺」「割竹形木棺」『日本考古学事典』三省堂 240頁 929頁

挿図出典

図33 岡本篤志作成

図34 三味線塚(三田・森・飯塚・川口2001 第22図を一部改変トレース) 吸坂E1号(浜崎・立原・広岡 2002 第7図を一部改変トレース)

図35 森下作成